

曾村充利先生のご退職によせて

Niiya, Yu / 新谷, 優

(出版者 / Publisher)

Faculty of Global and Interdisciplinary Studies, Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

GIS journal : the Hosei journal of global and interdisciplinary studies

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

3

(発行年 / Year)

2023-03



曾村充利先生のご退職によせて

GIS 学部長 新谷 優

法政大学の人文科学研究科に入学されてから今日まで、曾村先生は 47 年という年月を法政大学と共に歩んで来られました。曾村先生以上に法政大学のことを理解されている方を私は知りません。曾村先生は、ほぼ 40 年にわたり、研究、教育、学部運営の各領域で貢献をされました。しかし、曾村先生が何者でいらっしゃるのかを一言で表すなら、それは「大学教員」でも、「教育者」でも、「研究者」でもなく、「学者」であると私は確信しています。曾村先生の研究、教育、学部運営の全てに共通し、私が何よりも敬服するのは、先生の大局観、知識の厚みです。すぐに目先のことに囚われて、浅慮な行動に出がちな私は、曾村先生のせめて 10 分の 1 の知識と思慮深さがあればと思わずにられません。そのような曾村先生と 14 年間、同僚として時を共にできたこと、また最後に学部を代表してこの文章をしたためられること光栄に存じます。

曾村先生は法政大学の卒業生でいらっしゃいます。1982 年に人文科学研究科英文学の博士後期課程を修了されてすぐに第二教養部の非常勤講師を務められました。1984 年には経済学部助教授になられ、その 7 年後の 1991 年に教授となりました。2003 年からは人文科学研究科英文学専攻の兼任教員を務められながら、2006 年には GIS の前身である Institute of Global and Interdisciplinary Studies (IGIS) の立ち上げに尽力され、2008 年のグローバル教養学部 (GIS) の設立に多大な貢献をされました。GIS が設立当初から誇る学部独自の留学プログラム Overseas Academic Study (OAS) は、プログラム立ち上げの際に、曾村先生がアメリカのサンノゼ州立大学まで赴き、留学の受け入れを自

ら交渉されたとうかがっています。サンノゼ州立大学は今でも GIS 生に大変人気のある留学先です。

曾村先生は 2008 年から教授会主任として 3 年 (2008-2010)、さらに学部長として 5 年 (2011-2014; 2017) の計 8 年もの長期にわたり GIS を率いてくださいました。大学 4 年間の教育を全て英語で行うという学部やプログラムは、GIS の設立当初は国内ではほとんど前例がなく、まさに英語イマージョン教育のパイオニアでした。伝統ある日本の大学に全く新しいスタイルの学部を創造し、それを運営するのは、「大変」という言葉では足りないほどのご苦労がございました。私は 2008 年に助教として採用され、言われた授業をこなし、割り当てられた委員会に出席するだけだったので、その当時の執行部がどのような修羅場をくぐり抜けてきたのかは存じません。それでも教授会で「GIS の存続の危機」という類の発言が度々なされていたのは今でも鮮明に覚えています。

曾村先生が学部長でいらした 5 年の間、GIS は入学定員を 50 名から 66 名、さらには 102 名まで大きく増やしました。短期間で入学定員を 2 倍にまで増加させるのは、言うは易し行うは難しです。入学者獲得のための入試改革からはじまり、学生の英語力と学力の担保、少人数教育を維持するための授業コマ数の増加、それを教える教員の新規採用人事、カリキュラムの再編等々が、通常の学部長の業務に加わるのですから、想像を絶する仕事量だったと思います。GIS は 2023 年 4 月に 15 周年を迎え、延べ 1300 人の卒業生を送り出したこととなります。今日、GIS が日本の大学のグローバル化のフロントランナーとしての地位を確立しているのは、曾村先生の長期にわたる並々ならぬご尽力があつてのことです。

学部長の任を離れられてからも、曾村先生は新米学部長の相談役として執行部を支えてくださいました。GIS は平均年齢 46 歳の若い学部で、法政大学の歴史、伝統、文化を知らない教員が多数を占めます。また、国籍も文化背景も異なる教員ばかりですので、法政どころか、日本の大学というシステムや、意思決定過程などについても知識が浅く、拠り所になる共通の常識がありません。その中で、曾村先生が示される見解は、自分たちの立ち位置と方向性を決めるのに欠かせない灯台のような役割を果たしていました。GIS 教授会では、職位や年齢に関係なく、互いをさん付け、またはファーストネームで呼び合っています。しかし、曾村先生は唯一の例外で、誰もが「曾村先生」または Professor Somura とお呼びしています。どうしても敬意を表さずにはられない、我々の先生なのです。

曾村先生の大局観は、やはりそのご研究に由来しているのでしょうか。ご専門は十七世紀英文学で、特にイギリス形而上派の詩人ジョン・ダンと、「ジョン・ダン伝」を著したアイザック・ウォルトンを中心に研究をされています。1990年から1992年と2001年から2002年の二度にわたり、イギリス・ケンブリッジ大学のダーウィン・カレッジで客員研究として赴き、アングリカニズムとイギリス保守派の文化を肌で感じながら研究を進められたそうです。それぞれの研究成果は『ジョン・ダン博士の生涯』（こびあん書房、1993）、『釣り師と文学—イギリス保守主義の源流 アイザック・ウォルトン研究』（聖公会、2010）として出版されました。「釣り師と文学」はウォルトンの文学と思想を十七世紀イングランドの歴史、特に教会史の文脈の中で捉え直し、その文学的達成を明らかにした貴重な研究書だと言われています。ウォルトンとジョン・ダンおよびグレート・テュー・サークルとの人間的交流、そして彼らと共有するアングリカニズム思想を論じられています。2021年には法政大学出版局から増補新版が出ています。その他にも多くのご著書・論文を執筆されていますので、詳細は業績をご覧くださいればと存じます。2009年には英米文化学会の副会長、2014年には理事長、2015年からは会長を務められています。

曾村先生の授業は、先生の温厚なお人柄もあり、常に学生で溢れておりました。Introduction to English Literatureをはじめとした英文学の科目にとどまらず、イギリス文化を学ぶ Contemporary British Culture や UK: Society and People も人気科目でした。学生の面倒見が良い先生であるため、曾村先生のゼミ（British Culture and Literature）には英文学が学びたいという学生だけでなく、「とにかく曾村先生のゼミに入りたかった」という学生も多く集っています。そこで文学の興味に火がつき、国内・海外の大学院に進学したゼミ生も少なくありません。

研究や教育、そして GIS ならびに法政大学の発展に常に力を注いでくださったことに、心より感謝申し上げます。曾村先生の学内外での貢献に対して、GIS 教授会は先生を名誉教授に推挙し、大学よりその称号が授与されることになりました。今後も大局的な視点から本学部へのご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。